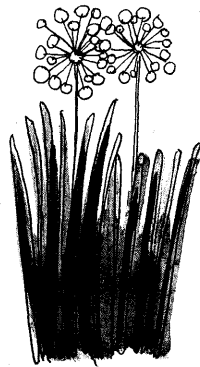


## 心の鍵

松井とし



「熱はないが、幼稚園に行きたがらない」という母親からの電話連絡の後、S男は一日ほど園を休んだ。少しおどけた大きな声で「お・は・よ・う!」と言って、久しぶりに幼稚園にやってきたその日、彼が描いた一枚の絵が忘れられない。

お弁当の後S男は、部屋で一人後片付けをしていた私のところへ「絵を描きたい」と言ってきた。彼の自発的なはたらきかけをうれしく思い、丁寧に応じて四つ切りの画用紙を渡すと一心に描き始めた。線で描かれたその絵は象徴的な絵であった。右下に囲みがありその中にヒトが描かれている。そこから上の方に、ひかれた一本の線まで通路がくねくねと続いていて、上にいくに従って少しずつヒトが増えていく。そして、上下を切り分けたその線の上には、たくさんのヒトがにぎやかに描かれている。

描き上げたS男は静かに「描けた」と言い、小さな息をつくと自分から説明しだした。

「僕はここから（囲みの中）出る鍵をなくしちゃったから、ずっと出られなかったの」

「でも、やっと鍵が見つかって地上に出てきたら、友だちがたくさんいたの」

清々と話すS男の話を聞きながら、私は五歳の子どもの心が表したものに對して畏敬の念を覚え、感動していた。心が軽くなったのだろう。S男は友だちのところへ駆けていった。「風邪を引いても休ませるのに苦労する」と、母親たちを嘆かせるほど意欲的な子どもたちの姿。みんな楽しく過ごしていると思ひ込んでいた私にとって、S男の登園拒否は自分との関係において受け入れがたいことであった。主因を母子関係や彼自身の身体状況等ととらえた私は、特別な働きかけをせず、彼が自分を取り戻すのを待つことにした。S男には姑息的な呼びかけは通じないと思ひ、家庭で母子のゆっくりした時間を持つことの方が大切だと思ひたからである。

彼は自分で葛藤を乗り越えた。今こうして振り返ってみる時、心の鍵を開けるのは、彼自身だったのだろうと思ひ。しかし、彼の心に鍵をかけたのは、年長の二学期を『意欲的な生活と、密なる友だち関係』等と表面的にとらえ、日常性に埋没していた私が、作り出していた『環境』そのものであったのだろうと胸が痛む。

（元・幼稚園教諭）